

## 多元的価値に基づいた「世界史」構成の開発

A Model of World History Framework based on the Plural Values

乗 田 政 長

(大阪府立平野高等学校)

### 1 はじめに

近年話題になった「歴史の終わり」<sup>1)</sup>や「オリエンタリズム」<sup>2)</sup>などに見られる歴史認識は、それぞれ異なる社会的、歴史的条件下に生活している人々の価値判断の相違を如実に物語っている。前者は、世界はリベラルな民主主義によって安定化の方向に向かっていると述べたものであり、後者はそうした見方そのものが、一部先進国の身勝手な偏見にすぎないことを看破しているのである。<sup>3)</sup>

個々人の価値判断の背景には、伝統文化や経済状況、宗教やイデオロギーなど、環境要因が大きく影響する。特に歴史は、各人が置かれてきた環境を説明する道具として、最も価値が混入しやすいものなのである。まさしく歴史は、多くの事件と複雑な関連性、複数の価値観が行き交う宝庫であると言える。

現代の社会は、技術や資本、情報や通信など、ボーダーレスな世界へと動きつつある。人と人との交流もあらゆる形で促進され、それに伴って様々な問題が生起してきている。絶え間ない地域間紛争やテロの横行、外国人労働者の流入と失業問題、国際的な富の不均衡と国内的な階層構造の垂直化など、国内、国外において、いわば「第三世界化」<sup>4)</sup>が進行しているのである。

こうした国際環境の中で、世界史教育が解決しなければならない課題は、あらゆる社会階層やあらゆる国家、民族の立場をも考慮し、多元的な価値判断が可能な世界史の授業を行うことである。その前提には、価値の多元化を可能ならしめる世界史の構成原理を追求し、さらに開発を進めることが重要である。我が国の世界史教育は、その系統主義的性質のため、歴史構成の問題が、歴史認識の問題と不可分に結び付いている。その意味から、ここでは多元的な価値をカバーできる歴史構成の原理を考え、それに基づいた具体的な世界史構成の開発を目指す。

### 2 世界史構成の分析の枠組

社会学者の A. Y. So は、社会と歴史を見る「見方」について、「近代化理論」、「従属理論」、「世界システム理論」の三つに分類し、それぞれの特徴を紹介して

いる。<sup>5)</sup> 社会発展のモデルとしてのヨーロッパ型近代化が、第三世界などでも実現可能であると思われる時代は、「近代化理論」の見方が優勢であった。しかし、第三世界の窮状が、実は歴史的、構造的なものに原因があり、決してヨーロッパ型近代化では状況の解決は難しいことが分かってきたとき、「従属理論」が生み出されてきた。前者は、いわば先進資本主義諸国からの発展のモデルを提起し、後者はそのアンチテーゼとして、第三世界の立場から、世界資本主義体制への批判を行ったのである。

これら二つの「見方」は、それぞれ第一世界と第三世界の自己主張として受け取ることができる。従来の我が国の世界史教育においては、前者の「見方」が圧倒的であり、それゆえに西洋中心主義に過ぎると批判があった。またその点を補うためになされた「文化圏学習」も、十分に世界の諸文化の価値相対化を進めたとはいえず、あらたな問題も提起されている。<sup>6)</sup> あるいは、こうしたことを主題学習によって解決しようという試みもあるが、<sup>7)</sup> あくまでも世界史の構成の問題として位置づけ、根本的な変革を考えなくては、本当の意味での解決とはならない。これは、主題的に第三世界に焦点をあてたり、「従属理論」のアプローチのように、一部、「植民地化」された地域の窮状を心情に訴える手法によって紹介するということを指しているが、<sup>8)</sup> 紹介された側の地域のネガティブなイメージはそのまま生徒の認識として記憶されるに留まるのである。世界史構成に必要なのは、先進国のみを「主役」にしたり、第三世界だけを「見る」のではなく、「世界」を主語にし、内部にダイナミックな支配と被支配の関係を構築することであり、それによって始めて、諸地域の各々の価値の並立を可能にするのである。

そのために有効なのが、「世界システム理論」である。まさしく、「世界」を主語として構成することが可能であり、諸地域の繋がりを、構造的に捉えることにより、網羅主義的世界史に代わって、社会構造とシステムの変化を追うことで、歴史の流れや空間的な繋がりの理解が容易になる。しかも、単なる「文化圏」の並列ではなく、ダイナミックな支配と被支配との関

係が明かになり、辺境の地域の歴史も、システムの一部として描き出すことで、西洋中心主義を相対化することができるのである。

### 3 既存の世界史構成理論

以下に既存の世界史構成の概念図を作成し、考察してみる。

#### (1) 近代化理論の世界史構成

図の1と2は、従来の「文化圏学習」を概念化したものである。図1は、1960年版、図2は1978年版の高等学校「世界史」に基づいたもので、縦軸は時間の流れを、横軸は空間的な広がりを表現している。両方とも、16-18世紀を近代の始まりに置き、それ以前をそれぞれの「文化圏」を並列に配置して構成されている。これでは、各文化圏相互の交流関係は希薄で、しかもそれぞれが静態的に描かれていることが分かる。また近代以後はヨーロッパを中心とした「列強」によって世界が一体化され、近代以後が、前近代とは異なる特別で意味のあるものであるような認識を与え、かつヨーロッパ中心主義を助長する結果となっているのである。いわば近代化理論の世界史構成が、そのままの形で表されているにすぎず、<sup>9)</sup> 前近代と近代とを全く異なる論理によって配列し直したものである。

#### (2) 反近代化理論の世界史構成

西洋中心主義を相対化し、独自の視点より世界史を眺めた歴史家に M. G. S. Hodgson がいる。<sup>10)</sup> 図の3は彼の理論を下敷きにしたものである。内側の実線枠は彼の言うアフロユーラシア複合体<sup>11)</sup> を表現しており時間とともにそれが空間的に広がっていくことを表している。このモデルでは、アフロユーラシア複合体が歴史の主役であり、中世においてはイスラムがその中心に位置づけられている。近代と前近代との間には、「大転換期」<sup>12)</sup> という時期によって完全に区切られてはいるが、これは世界が一体化したものというのではなく、世界はあらかじめ一体化しており、ただ質的な転換が生じ、世界全体として近代に移行したのだと見ており、ヨーロッパ中心主義をこのような形で相対化している。ただ、オセアニアやアメリカ大陸などがその中に参入するのは16世紀以降となり、そのため、全世界をカバーするには無理がある。この地域が近代以前に、どのような形でアフロユーラシア複合体と関わるのかを探る必要がある。

#### (3) 世界システム理論の世界史構成

従属理論によって世界史を構成するのは、その性格上不可能である。なぜなら、従属状態に置かれた第三世界それぞれの国家史の総体としてしか描けないから

#### \* 1 世界史構成概念図

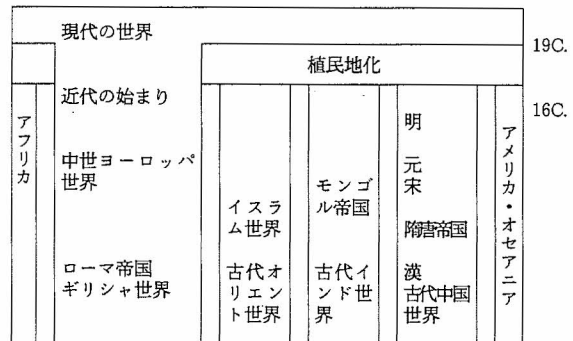


図1

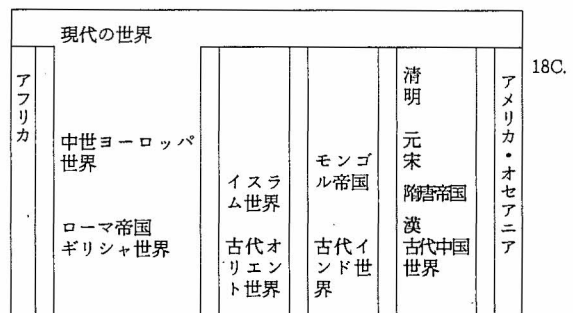


図2

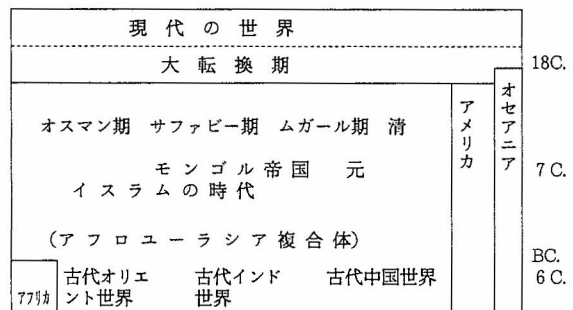


図3

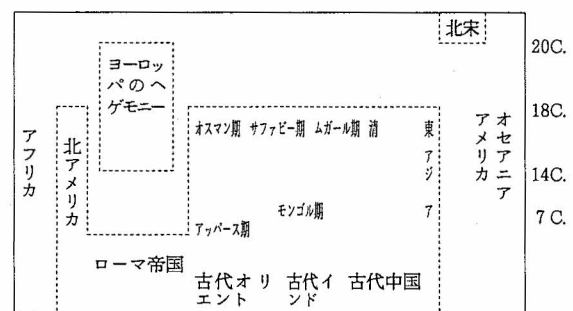


図4

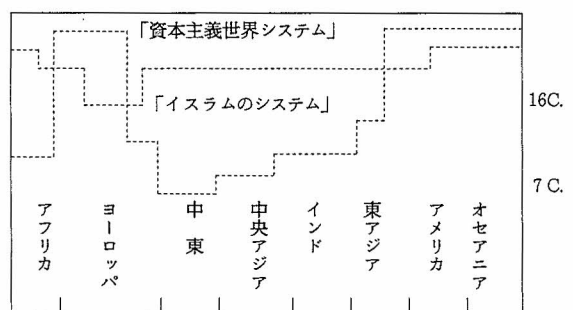


図5

である。ただ、第三世界が生み出され、従属下に置かれていった過程に注目する視点から眺めたものに、L. S. Stavrianos の著書があるが、<sup>13)</sup> これも第三世界を主役に置いたものとなっており、多元的な価値を保証するとは言い難い。

そこで、ここでは世界システム理論に基づいた世界史構成について考えてみる。図の4は、世界システム理論の A. G. Frank のプロジェクトを基にしたものである。Frank は、I. Wallerstein<sup>14)</sup> や G. Modelski<sup>15)</sup> らとは異なり、単一の世界システムが、過去5000年の長きに渡って存在していると主張している。<sup>16)</sup> その理論背景には、近代以前の13世紀にすでにユーラシア大陸を横断する世界システムがあったと主張する J. L. Abu-Lughod の研究がある。<sup>17)</sup> そしてその中に見られる、ヘゲモニーの変遷過程こそが、近代世界システムのみを特別なものとしてしまう欠陥をうまく補強してくれる。つまり、ヨーロッパが中心となった近代世界システムは、それ以前に存在していた、ユーラシア大陸内部の世界システムのヘゲモニーが移動したことによって生み出されたものであり、両者は断絶した関係なのではなく、連続したものであるという見方なのである。この構成原理の特徴は、最初から世界を一体化したものとしているということと、近代と前近代との断絶を認めないということ、さらに各時代の様相はヘゲモニーの変遷によって表され、それは同時にダイナミックな支配と被支配との関係をも表現しているということなどである。

#### (4) 世界システム理論の拡張

図の5は、次元の異なる複数の世界システムを想定したもので、J.O.Vollの研究を基にしている。<sup>18)</sup> Voll は、世界システムの概念を拡張し、資本の蓄積や交換を中心としたシステムとは別に、「社会倫理的シンボル」<sup>19)</sup> としてのイスラムを仲立ちにした世界システムを想定した。近代以後、「資本主義的世界システム」が我々の生活の中心を占めているのに対し、イスラムという異なるシステムの存在を提起することによって、ヨーロッパ中心主義を相対化すると同時に、現代もなお人口の急増が続いているイスラムの歴史的役割に注目させることが可能となっている。

#### (5) 「文化圏学習」改良型の世界史構成

図の6は、「地域世界」を設定することによるモデルである。<sup>20)</sup> それぞれの「地域世界」は、今までの「文化圏」とは異なり、相互に交流可能な流動的なものとして表される。このモデルでは、従来の「文化圏学習」では描きえなかった、空間や構造、時間の重層的な関係を、国境を超えた地域空間としての場の中に結び付け、動態的な「地域世界」の複合体として世界

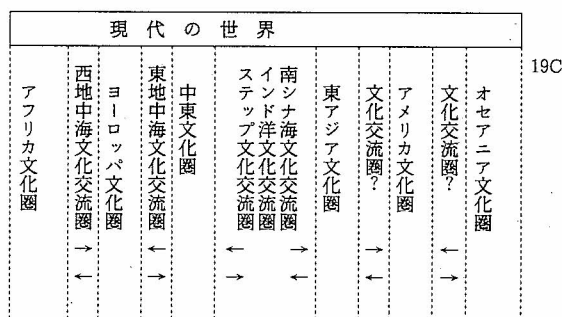


図6

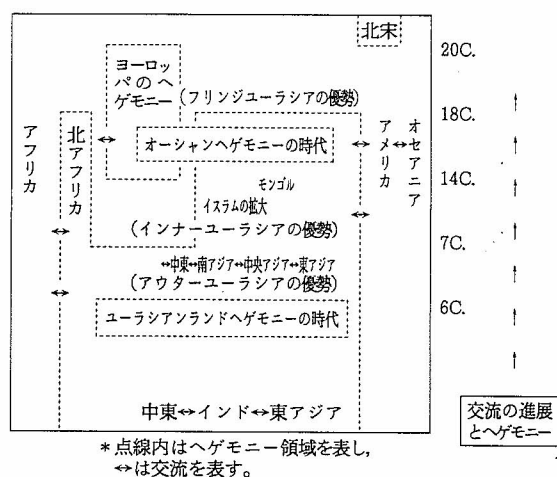


図7

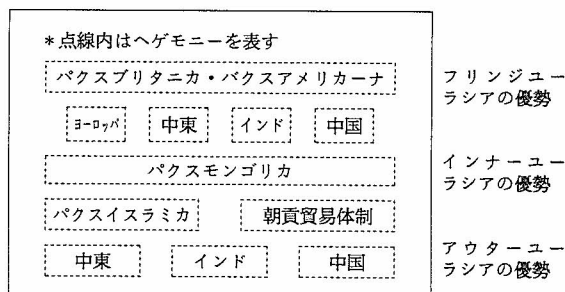


図8

を構成し直し、「文化交流圏」を仲立ちにすることでよりダイナミックな歴史構成が可能となっている。しかし、このモデルでは、図の2と同様に、19世紀以後の世界が、結局はヨーロッパが中心となって世界を一体化させていったとする構成になってしまい、西洋の特別な位置が相対化されてはいない。これを克服するのは、西洋型近代化とは異なる、独自の近代化がそれぞれの地域で独自になされているということ、また今がまさにその近代化の途上なのであるとする以外にはない。こうした西洋型近代化とは異なる近代化の類型を、「後発型近代化」と呼び、<sup>21)</sup> それぞれの歴史的制度的条件の下で独自の近代化をそれぞれの地域世界が遂げているのだとする理論は、このモデルの欠点がある程度は補っても、「後発型近代化」という言葉自体に表されているように、西洋の優位性を覆すことは困難なのである。

#### 4 多元的価値に基づいた世界史構成

##### (1) 多元的価値に基づいた世界史構成概念図

以上のようなモデルを参考に、私が独自に開発したのが図の7である。これはFrankの理論を基本にし、時間の軸に世界の交流の密度をとったものである。時間の流れは、人々の交流域の拡大とその加速化の過程として表される。Hodgsonの大転換期にヒントを得たもので、ヘゲモニーの中心は、中東や中国など、古代以来複数の地点を螺旋的に移動する。これは、人々の交流が地理的障害と交通技術の未発達によって自由になされない結果、複数の地点が交流の中心となるためである。それが次第にヨーロッパや北アメリカに一元化されていくのは、世界の交流の密度が密になり、複数のヘゲモニー拠点が必要でなくなったためである。近代以後の世界を、ヨーロッパ勢力による一体化で表現していたことに代わり、このモデルではヘゲモニー拠点の移動によって表し、交流密度の上昇が拠点の一元化をもたらしたものと見ている。これによって、ヨーロッパ中心主義を相対化し、時間の流れを「進歩という価値的な基準ではなく、交流の疎密によって代表させることで、「現代」の特殊性をカバーできるものとなっている。

ここで問題となるのは、具体的なヘゲモニー拠点の所在ということになる。G. ModelskiはN. D. Kondratievのサイクル理論を利用して、世界大国が成立しそのヘゲモニーが解体しながら次の世界大国へと受け継がれていく過程を、主に海軍力と生産諸力、世界システム内におけるグローバルリーダーシップといった点から考察している。<sup>22)</sup> 近代世界の富の集積が、海運によってもたらされてきたことに鑑み、この指標は有効である。しかし、Modelskiのヘゲモニー理論もWallersteinと同様に、近代以後に焦点をあてたものでありそれ以前には理論が存在しない。これを補い、独自の視点からヘゲモニー理論を打ち立てたのが西川吉光の理論である。<sup>23)</sup> 彼は、Modelskiの理論を前近代にまで拡大すると同時に、古代から現代までを大きく二つの時期に分割して考えている。これが図中にある、ユーラシアンランドヘゲモニーとオーシャンヘゲモニーという二つの時代区分である。Modelskiが近代の指標に海軍力を選んだように、西川は前近代の指標に馬を中心とした騎馬軍勢力を措定した。そしてさらにユーラシア世界を、アウターユーラシア、インナーユーラシア、フリンジユーラシアの三つの地域に分け、それぞれが軍事的にも経済的にも優勢であった時代として古代、中世、近代をあてている。西川は、この理論の源泉を、かつての地政学者であるマッキンダーやスパイクスマンに求めているが、彼らの理論は、

大陸国家と海洋国家の対立という図式で世界の歴史を眺めたもので、諸地域のつながりを、構造的に捉えることにより、「世界」を主語として構成することが可能であり、多元的な価値をカバーできるものと考え、このモデルに採用した。

またヘゲモニーの拠点は、古代においては三つ、中世では二つ、モンゴル帝国によって一つに結びつけられ、モンゴル帝国が崩壊することによって四つに分かれ、近代になってまた一つになっていく構造になっている。これを表したのが図の8である。中東、インド中国にあったヘゲモニー拠点は、西のパクスイスラミカの領域と、東の中国朝貢体制の領域とに二分される。その後、モンゴルの支配下にパクスモンゴリカの時代がおこり、<sup>24)</sup> その崩壊後、再び、インド、中国、中東がヘゲモニー拠点となるとともに、それまで半辺境の立場にあった北西ヨーロッパが、この時期に中核へのし上がり、第四の拠点を形成する。<sup>25)</sup> そしてヘゲモニー拠点はヨーロッパへと移動するとともに再び一つとなってフリンジユーラシア、すなわち海洋国家優勢の時代となるという構造になっている。ただ、この図では、オセアニアやアメリカなどの位置が不明確になっているが、今後の研究として追求していきたい。

##### (2) 多元的価値に基づく世界史構成

以上のような概念図をもとにして、世界史構成の試案として提示したのが表の1である。全体は西川の理

表1

第1部 ユーラシアンランドヘゲモニーの時代
序章 人類の誕生
第1章 文明の始まりとヘゲモニーの形成
1. 中東の古代世界とヘゲモニーの形成
2. 南アジアの古代世界とヘゲモニーの形成
3. 東アジアの古代世界とヘゲモニーの形成
4. アメリカの古代世界
5. アフリカの古代世界
6. オセアニアの古代世界
7. 初期交流の特徴と諸文明の相互性
(アウターユーラシアの優勢)
第2章 交流の広がりとは各ヘゲモニー領域の繁栄
1. 古代の諸帝国
2. アレクサンドロスの帝国
3. 地中海世界の展開（ローマ帝国、アルプスの北とサハラ以南）
4. 中東世界の展開（イスラム以前の諸帝国、レバントの交易国家）
5. 南アジア世界の展開（南インドの交流、インド洋と海峡地域）
6. 中央アジア世界の展開（遊牧帝国、ステップ交流圏）
7. 東アジア世界の展開（極東アジア、東南アジア）
8. 文化交流圏の役割
第3章 イスラムの成立と拡大
1. 中東世界へのイスラムの広がり
2. 中央アジア世界へのイスラムの広がり
3. アフリカ世界へのイスラムの広がり
4. イスラムのネットワークとその歴史的役割
第4章 東アジアの朝貢体制
1. 中国を中心とする朝貢貿易
2. 宋の繁栄

3. 東南アジアの地域交流
4. 東アジアと中央アジアの交流  
(インナーユーラシアの優勢)
- 第5章 地球規模の交流
  1. モンゴル帝国の成立と発展
  2. 中央アジアルートの発展
  3. 地球規模の相互交流
- 第2部 オーシャンヘゲモニーの時代
- 第6章 交流の加速化
  1. 疫病の流行とヘゲモニーの移動
  2. 東アジアの変化
  3. イスラムの三帝国
  4. ヨーロッパ～アフリカ～アメリカのルート
  5. ヨーロッパ～アジアのルート
  6. オセアニア～ヨーロッパのルート
- (フリンジユーラシアの優勢)
- 第7章 ヨーロッパのヘゲモニー
  1. ヨーロッパ諸国家の特徴
  2. 産業革命と世界の両極分離
  3. 世界の植民地化と中核国家
  4. 半辺境国家と中核国家との対立, 第一次世界大戦
  5. 辺境国家の低開発
- 第8章 アメリカ合衆国のヘゲモニー
  1. 半辺境国家の変化と社会主義革命
  2. 植民地の独立運動と民族運動
  3. 第2次世界大戦
  4. 国際連合の成立と「冷たい戦争」
  5. 植民地の独立と第三世界の成立
- 第9章 現代の世界
  1. 多極化した世界
  2. 未来への遺産

表 2

- 第5章 地球規模の交流 (インナーユーラシアの優勢)
  1. モンゴル帝国の成立と発展  
北ユーラシアとモンゴル  
(ここでは、モンゴル人の生活、特に遊牧と騎馬軍勢力、さらに東西交易について説明する。)  
モンゴル帝国の拡大  
(西ではバクスイスラミカとの戦い、東では宋との戦いを通じて、二つのヘゲモニー領域がモンゴルによって併合され、単一のバクスモンゴリカの時代が現れる過程を説明する。)  
モンゴル帝国の周辺  
(モンゴル帝国と対立しながら、そのヘゲモニーの傘下に収まらなかった国々、特にマムルーク朝の独特のヘゲモニー領域、日本やベトナムなど頑強に抵抗した国を半辺境と位置づけ、モンゴル帝国の限界について説明する。)
  2. 中央アジアルートの発展  
(ここでは、モンゴル支配によって生じた交易の大規模化とその安定性、交易ルートについて説明する。)
  3. 南アジアルートの発展  
(モンゴルとマムルーク、さらにモンゴルと南宋との対立などで衰退していた北インドからペルシャ湾の交易ルートに代わり、紅海からインド洋を経て東南アジアへ至るルートが中央アジアルートとともに発展していくことを説明する。)
  4. 地球規模の相互交流  
(世界的ヘゲモニーであるモンゴル帝国の出現によって、東と西の交流がかつてないほどに活発化すると同時に、その周辺地域であるアフリカ、ヨーロッパ、インド、東南アジアなども、マムルーク朝やマジャパヒト王国、北イタリア諸都市などの活動で活発化したことを説明する。)

論に基づき、第1部をユーラシアンランドヘゲモニーの時代、第2部をオーシャンヘゲモニーの時代としている。第1章の「文明の始まりとヘゲモニーの形成」

は、地域的なヘゲモニーがいわゆる四大文明を中心に形成されていく過程を中心に構成している。しかもそれらは、それぞれ孤立しているのではなく、交流と文化の相互性を有していることに注目させるため、7として「初期交流の特徴と諸文化の相互性」という項目を特に設けている。これと次の第2章とは、「アウターユーラシアの優勢」の時代であり、中東やインド、中国などにヘゲモニーの拠点があり、それらの間に「文化交流圏」が成長していく過程を、第2章の3～8で説明している。

第3章と第4章は、古代文明の文化的蓄積を継承するものとして、イスラム世界と東アジア世界とを置き、それらを中心にした小宇宙としてのイスラムネットワークと朝貢貿易体制が説明される。これらは、第5章の地球規模の交流を準備するもので、その主役の一人がモンゴルだということである。モンゴル帝国の成立が、東と西のヘゲモニー拠点を結び付けたというのは、岡田英弘<sup>26)</sup>やAbu-Lughodも指摘するところであるが、これによって地球が一体化したというのではなく、相互の交流が一気に加速化したことを表している。また、それを可能にしたのは、中央アジアを東西に横切るインナーユーラシアが優位に立った結果なのである。

第6章以下は、疫病の流行やモンゴル帝国の崩壊など、世界を繋ぐ交流のルートが閉ざされた結果、内陸部から海洋部へと交流の主役が交替し、それによってヘゲモニーが移動し、ヨーロッパが中心となっていく過程を表している。しかしヨーロッパのヘゲモニーが確立されるのは第7章以下であり、それをさして「フリンジユーラシアの優勢」の時代としている。特にこの部分は、交流が急速に進展し、国家や地域の垂直的な両極分解が進んでいったことを、辺境、半辺境、中核の力関係に注目しながら構成している。富や資源の集約の場が、大陸から海洋へと動き、海運による大量貿易と海軍による海洋支配とが、こうした国家間の垂直構造を促進したことがその背景にあることは言うまでもない。

こうした世界史構成試案の中の具体的一例として、第5章を表の2の形で提示する。<sup>27)</sup>これは第3章の「イスラム世界の成立と拡大」と、第4章の「東アジアの朝貢体制」を受けて、ユーラシアを繋ぐ東と西のヘゲモニー拠点を結び付けたモンゴル帝国に焦点をあてた章である。世界システムの内部で、中東と中国とが、それ以前では強力な中核部分を形成していた。そして前者は、アフリカやヨーロッパを辺境、半辺境部分に従え、後者は東アジア、東南アジアを同じく従えて、世界に君臨していたと見ることができる。これら二つのヘゲモニー世界は、それぞれ中央アジアのルー



トと南アジアのインド洋ルートとで結ばれていたが、これをより活発にし、世界規模の相互交流を促進したのが北のモンゴルであり、南のルートを押さえたマムルーク朝なのである。

モンゴル帝国によるユーラシアの席卷は、それまでの局地的ヘゲモニー拠点を一つに集約し、世界システム内での単独のヘゲモニーを成立させた。西のパクスイスラミカと、東の中華帝国とをともに支配下に置き両者を結んでパクスモンゴリカの時代を現出させたのである。ただ、西においてはマムルーク朝が独自のヘゲモニー拠点を形成、これと対抗し、カイロを中心にヨーロッパからインドに至る商業ルートを勢力下に置き、東では南宋やベトナム、日本といったいわば半辺境世界が頑強に抵抗していたが、おおむねにおいてモンゴルがシステムの中核として世界の富を蓄積する立場にあったと見ることは可能であろう。こうした立場から、ヘゲモニー拠点がかつてのアウトユーラシアを離れ、インナーユーラシアへと移動したと見て、世界史上での新たな次元へと移行したと考えてこの章を構成している。

## 5 おわりに

我が国の世界史教育は、明治期以来「すでにあるもの」として構成され、無批判に受け入れられてきたきらいがある。そのため、その時々政治的要請と歴史的事情によって様々な改変を被り、歴史教育が歪められてきたのである。今、改めて構成原理を分析し、吟味し、さらに開発することは、今までなおざりにされてきた世界史認識の基盤を確認することでもある。その意味で、本研究が次なる世界史構成の方向性を指示する一つのきっかけとなることを期待している。またこれによって私自身の世界史構成作業が終わったわけではない。今後は具体的な中身について研究を深めていきたいと考えている。

## <注>

- (1) F. Fukuyama, *The End of History and the Last Man*, Penguin, London. 1992.
- (2) E. Said, *Orientalism*, Penguin, London. 1995.
- (3) これについては、拙著「多元的価値に基づいた世界史構成の研究」兵庫教育大学大学院修士論文 1995年参照。
- (4) 「第三世界化」とは、国際的な国家の序列化を指すだけでなく、国内の階層構造の固体化とその対立構造をも表している。
- (5) A. Y. So, *Social Change and Development*, Sage, New York. 1990.
- (6) 二谷貞夫『世界史教育の研究』弘生書林, 1988年参照。
- (7) 例えば、田淵五十生『「主題学習の導入を」学習内容と授業構成の検討』社会科教育論叢 1981年参照。
- (8) 例えば、鈴木亮や吉田悟郎らのように「日本から世界を見る」といった視点や、後述する「従属理論」からの視点では、西洋中心主義や自民族中心主義などの弊害は除去できるが、多元的な「視点」の確保にはつながらず、全体としての世界史構成には無理がある。  
歴史教育者協議会編『あたらしい歴史教育1』大月書店, 1993年参照。
- (9) これは、世界の一体化や進歩、発展といった価値的な指標が歴史構成のカギになっているからである。  
原田智仁「世界史教育における近現代史構成の原理と課題」(『教職課程研究』姫路獨協大学教職課程研究室編, pp.137-150. 1995年) 参照。
- (10) M. G. S. Hodgson, *Rethinking World History*, Cambridge University Press, New York. 1993.
- (11) Afro-Eurasian complex
- (12) 「技術至上主義」や「加速化」という言葉をカギに, great transmutation という表現で表している。
- (13) L. S. Stavrianos, *Global Rift*, Quill, New York. 1981.
- (14) I. ウォーラーステイン『近代世界システムⅠ・Ⅱ』川北 稔 訳, 岩波現代新書, 1981年
- (15) G. モデルスキー『世界システムの動態』浦野, 信夫 訳, 晃洋書房, 1991年
- (16) A. G. Frank and B. K. Gills, *The World System*, Routledge, New York. 1993.
- (17) J. L. Abu-Lughod, *Before European Hegemony*, Oxford University Press, New York. 1989. A. G. Frank, "The Thirteenth-Century World System: A Review Essay", *Journal of World History*, New York. 1990.
- (18) J. O. Voll, "Islam as a Special World-System" *Journal of World History*, New York. 1994
- (19) set of sociomoral symbols
- (20) このモデル作成にあたっては、以下の文献を参考にした。

- ・原田智仁「文化交流圏としてのサハラ新しい世界史学習の構想－」社会科教育研究, 1990年
  - ・同「探求的歴史授業の教材開発－7・8世紀の東アジアと日本」社会科研究, 1990年
  - ・同「世界史教育と地域史研究」社会系教科教育研究, 1991年
  - ・二谷貞夫, 前掲書
  - ・同「世界史構成の諸問題について」社会科研究 1992年
  - ・田尻信一「広域的地域世界としての地中海世界－前近代の地域世界をどう構成するか－」筑波大学附属高等学校研究紀要, 1995年
- (21) 園田茂人「漢字文化圏における『近代化』の構図－『後発型近代化』の一ケースとして－」(『漢字文化圏の歴史と未来』大修館書店, 1992年)
- (22) G. モデルスキー, 前掲書
- (23) 西川吉光『ヘゲモニーの国際関係史』晃洋書房 1995年
- (24) 「パクスモンゴリカ」という用語については、家島彦一「イブン・バットウータの世界」(講座イスラム世界3『世界に広がるイスラーム』栄光教育文化研究所, 1995年)に準拠した。
- (25) ウォーラーステインは、15世紀の「封建制の危機」以来、北西ヨーロッパは「近代世界システム」の発信地となったとしているが、湯浅赳夫はブローデルやシュナイダーらを整理しながら、前近代的な世界システムの存在を訴えている。  
湯浅赳夫『世界史の想像力』新評論, 1996年
- (26) 岡田英弘『世界史の誕生』ちくまライブラリー 1992年
- (27) このモデル作成にあたっては、以下の文献を参考にした。
- ・J. L. Abu-Lughod, Before European Hegemony.
  - ・M. G. S. Hodgson, Rethinking World History.
  - ・Ross. E. Dunn, The Adventures of Ibn Battuta, University of California Press, Berkeley. 1989
  - ・宮崎正勝『イスラムネットワーク』講談社選書メチエ, 1994年
  - ・家島彦一, 前掲書